

現代のことば



こはら
小原 克博
かつひろ

十一月末、綾部市にある病院で医療倫理についての講演をすることになったので、この機会にと、前日から綾部を訪れた。京都駅から綾部駅までは特急で一時間程度なので、決して遠い距離ではない。私が乗車した「きのさき三号」にはたくさん乗客がいたが、おそらく大半は城崎を目指しており、綾部で降りる人は多くはなかった。この時期の綾部は多くの人にとって、冬の味覚を味わう旅程の「通過地点」の一つにすぎないのかもしれない。

医療倫理や先端医療の問題を関心の一つとしてきた私にとって、綾部を発祥の地とする大本は長らく興味をそそられる対象であった。もう十年以上前になるが、脳死・臓器移植の問題が議論されたとき、一貫して反対の立場を取ったのが大本であった。反対の声明を出すだけでなく、京都駅周辺でノン・ドナーカードを配布したり、署名活動をしていたのは、その是非はともかくとして、当時の私にとっては印象的であった。綾部訪問の機会を得た私は、大本

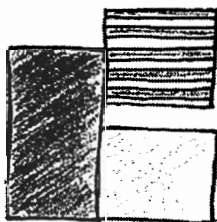
晩秋の綾部に想う

の知人に案内されて、聖地の一つ梅松苑を訪ねた。荘厳な神殿のたたずまいにも心奪われたが、それらが、戦時下の激しい弾圧を経て再建されたものであることに、多くのことを考えさせられた。戦時中、大本は不敬罪のことで弾圧を受け、神殿などの関連施設も徹底した破壊の対象となった。

そうした神殿の来歴もさることながら、今回の訪問でもっとも思い出深い場所となったのは、陶器作りや機織りをする施設であった。大本は信仰と芸術と生活の一体を重んじるという説明を受けながら、機織りの様子を見学していたとき、偶然にも機織りのために作業着を着て到着された出口紅・教主と鉢合わせになり、言葉を交わした。比叡山宗教サミットなど大きな国際会議で遠巻きに見てきた威厳ある雰囲気とは異な

り、かえって、その飾り気のない姿に、地に足の着いた信仰の素地を見たいと思った。

翌朝、この「現代のことば」欄を介して知り合った四方八州男綾部市長を訪ねた。一九五〇年に世界連邦都市宣言を日本で最初に行った綾部市は、中東和平の一環としてパレスチナ・イスラエルの子どもたちを綾部市に招く綾部プロジェクト（二〇〇三年）を、この市長のリーダーシップのもと行っている。綾部という小さ



渡辺 信子

な地方都市が、複雑な中東情勢に對してできることは「焼け石に水」にすぎないかもしれない。しかし、どのような平和の実現も、このような小さな一歩なしにはあり得ないだろう。最近では、全国に先駆けて、綾部市は水源の里条例を施行した。過疎化が進み、廃村寸前の集落を積極的に支援し、再活性化しようとする新しい試みが綾部から始まろうとしている。

京都というと京都市にもっぱら関心が向けられがちであるが、京都府のトータルな魅力を高め、また、全国および世界への発信力を増していくためには、綾部のような周辺都市が持つ文化・歴史や小回りの効いた先取性を積極的に評価すべきだろう。「通過地点」として横目で見ただけでは、もったいないと思う。（同志社大教授・キリスト教思想）